琉球文学への誘い

―『おもろさうし』の魅力―

嘉手苅　千鶴子



嘉手苅 千鶴子・かでかる ちずこ
沖縄国際大学文学部教授。専門分野は琉球文学。一九四九年生まれ。専修大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程単位取得。著書・論文に「琉球の展開」（『岩波講座 日本文学史 第15巻 琉球文学・沖縄の文学』 一九九六年）、「琉球文学にみる『露』の呪力」（『南島の文学・民俗・歴史』三一書房 一九九二年）、「『おもろさうし』太陽考」（『専修総合科学研究第2号』専修大学緑鳳学会 一九九四年）、「『おもろさうし』にみる神女群像」（『歴史評論第529号』校倉書房 一九九四年）などがある。

一 はじめに

琉球文学でもっとも注目されてきたものに、オモロ・琉歌・組踊がある。いずれも琉球の地に華開いた琉球方言による文学で、中でもオモロという歌謡は謎に包まれている。

かつて万葉の歌や記紀歌謡や祝詞などにたとえられた、オモロとはいかなる歌謡なのか。古琉球の時代に盛んに謡われ、近世のはじめ頃には二二冊の『おもろさうし』が出揃う。が、八〇年後にはすでに解しがたいものとなり、現代ではほとんど謡われていない。

『おもろさうし』は誰が、何のために、どのような方法で編んだのか。

本稿では古琉球の船旅や地方や神女のあらわれたオモロをとりあげ、夢の跡となっているオモロゆかりの地を訪れ、『おもろさうし』の世界を紹介する。

二 オモロとはいかなる歌謡か
―ふし名・独自の「一」「又」形式記号

オモロとはいかなるものか。まず、船旅オモロの中から比較的短い詩形の一例をとりあげる。

第十三巻　船ゑとのおもろ御さうし

［復元本文］

一二番　しよりゑとのふし
一　しよりもりぐすく
くもかぜす　よりそへ
のちがすゑ
せくさ　よせるまじ
又　まだまもりぐすく
クモカゼス　ヨリソヘ
ノチガスエ
セクサヨセルマジ

［訳文］

首里ゑとの節
一　首里杜城
雲風を寄り添え
後の末までも
精軍（敵軍）を寄せないだろう
又　真玉杜城
雲風ヲ寄リ添エ
後ノ末マデモ
精軍（敵軍）ヲ寄セナイダロウ

このオモロは、首里城を讃えた内容で、首里杜グスク・真玉杜グスク（首里城）は、雲風を寄り添えて、後の世までも、精軍（勢軍・敵軍）を寄せるまい（寄せ付けないであろう）、という意。

「首里杜グスク」は首里城のことで、「真玉杜グスク」はその美称である。

「雲風」は雲や風のことで、当時の外洋船は帆船であり、船人にとって命に深く関わった自然[redacted]

[redacted]

航海を祈願して雲風が謡われる[redacted]は寄り従えている[redacted]

る。

「後が末」はいつまでも、つまり永遠に、未来永劫に、の意。

「せくさ寄せるまじ」は精なる軍を寄せるまい、の意。敵軍を決して寄せ付けないだろう、と強い自信がこめられている。この文句は、那覇港のヤラザ杜の竣工祝いの巻十三の一八のオモロ（尚清王・一五五三年）に「ともすえせいいくさよせるまじ（十百末精軍寄せるまじ）」とあり、さらにはあとで紹介する巻二十の二「いしやらたうぐすく（石原グスク）」を讃えたオモロにもみえる。

全体は、首里城を、雲風の大自然を従えて永遠に敵軍を寄せ付けるまい、と賛美祈願したオモロであり、威風堂々とした首里城には南海の島々に君臨した王国の威厳さえ感じられる。

さて、巻十三のこのオモロは、はじめに「首里ゑとの節」というふし名があり、これにより謡われていたことがわかる。オモロは全部で一五五四首（安仁屋本。ただし尚家本は一五五三首）あるが、その中の一三六三首にこうしたふし名が記されている。

次に詩形について、オモロは全体的に不定形といえるが、ただしオモロ独自の「一」「又」の記号が用いられている。「一」ははじまりを示し、「又」は音楽的な繰り返しを意味すると解される。つまり、「一」が第一節で、つづく「又」は第二節である。ただし、第二節以下では共通する歌詞部分「くもかぜす～よせるまじ」の記載が省かれており、謡われたとおりに復元するには第一節に指摘できるこの繰り返し部分を添えたものと考えられる（カタカナ部分を補い、復元本文とした）。

なお、このあとに紹介するオモロでは、本文中に繰り返し部分を指摘し、訳文を添えた。

三『おもろさうし』はどのような歌謡集か

オモロを収めた歌謡集が『おもろさうし』である。オモロにはわずかな例を除いては作者名がほとんど記されていない。作者はおおかた不明である。その内容から、オモロの制作された時代は一二～一七世紀の頃のものとみられる。

全二二冊から成り、総数一五五四首のオモロが、三度にわたって編纂された。各巻にはそれぞれ表題があり、四巻を除いて編纂年次が記されている。すなわち巻一は嘉靖一〇（一五三一）年、巻二は万暦四一（一六一三）年五月二八日、巻三以下は天啓三（一六二三）年三月七日である。ただし巻一一・一四・一七・二二は記載を欠くが、巻三以下の巻とほぼ同時期の成立とみられる。あるいは他巻からの抜粋と思われるオモロからなる巻二二はもう少し遅れたことが考えられる。

現存する最古の『おもろさうし』の伝本は沖縄県立博物館蔵の尚家本で、国指定重要文化財となっている。

首里王府の編纂によるもので、全二二冊は各巻ごとにまとまっており、大きく八分類される（仲原善忠『おもろ新釈』）。次頁の「a『おもろさうし』の巻表題と分類」は、八分類された各巻の表題と内はその成立年を示したものである。[redacted]

女オモロ」としたのは、神女オモロに含めて考えられるものであり、他方「あとオモロ」[redacted]オモロ」としたのはわかりやすく呼称したものである。

a『おもろさうし』の巻表題と分類

神女オモロ

一　聞得大君がおもろ首里王府の御双紙（一五三一）
三　聞得大君かなしおもろ御双紙（一六二三）
四　煽りやえ差笠のおもろ御双紙（一六二三）
六　首里大君宣ん君君かなし百年踏み揚がり君の頂のおもろ御双紙（一六二三）

こねりオモロ［神女オモロ］

九　首里天ぎや末按司おそいかなしいろいろのこねりおもろ御双紙（一六二三）

あすびオモロ［神女オモロ］

十二　いろいろの遊びおもろ御双紙（一六二三）

地方オモロ

二　中城越来おもろ首里王府の御双紙（一六二三）
五　首里天ぎや末按司おそいかなし首里おもろの御双紙（一六二三）

七　首里天ぎや末按司おそいかなしはひのおもろ御双紙（一六二三）
十一　首里ゑとおもろ御双紙（不明）
十五　首里天ぎや末按司おそいかなし浦添北谷読谷山おもろ御双紙（一六二三）
十六　首里天ぎや末按司おそいかなし勝連具志川おもろ御双紙（一六二三）
十七　恩納より上のおもろ御双紙（不明）
十八　首里天ぎや末按司おそいかなし島中おもろ御双紙（一六二三）
十九　知念佐敷玻名城おもろ御双紙（一六二三）
二十　米須おもろ御双紙（一六二三）
廿一　久米の二間切おもろ御双紙（一六二三）

ゑとオモロ［船旅オモロ］

十　ありきゑとのおもろ御双紙（一六二三）
十三　船ゑとのおもろ御双紙（一六二三）

名人オモロ

八　首里天ぎや末按司おそいかなしおもろ音揚がり阿嘉犬子がおもろ御双紙（一六二三）

ゑさオモロ

十四　いろいろのゑさおもろ御双紙（不明）

公事オモロ

廿二　みおやだいりおもろ御双紙（不明）

以上のように『おもろさうし』全二二冊は、巻ごとにまとまりが認められ、各巻は大きく八分類することができる。収集の具体的な方法や編纂した目的は明らかでないが、以下では一一巻を占める地方オモロに注目したい。

四　地方オモロ巻の地域区分

『おもろさうし』全二二冊のうち、その半数巻までが地域ごとにオモロを集めたいわゆる地方オモロの巻である。以下に、各巻の表題（簡略した表題を記す）とその巻に収められたオモロの地域の間切名を（　）内にあげる。なお、間切名に「のちの…」と付したのは移動のあった名称を示したものであり、また離島の場合は島名を特に記した。

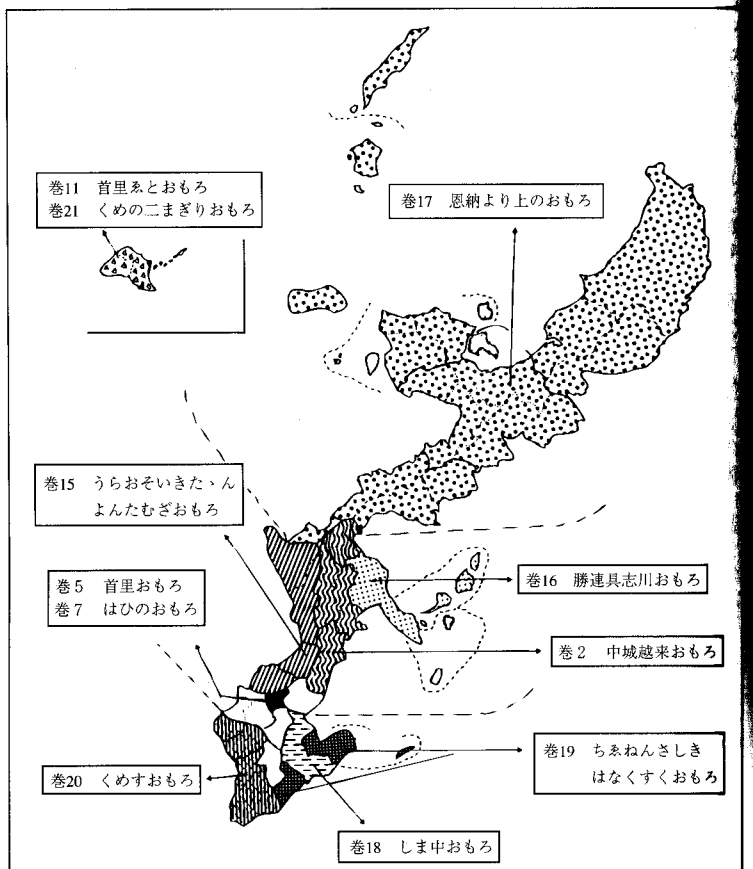
巻二　中城越来おもろ（中城間切・越来間切・のちの美里間切）
巻五　首里おもろ（首里）
巻七　はひのおもろ（首里）
巻十一　首里ゑとおもろ（久米島）
巻十五　うらおそいきたゝんよんたむざおもろ（のちの真和志間切の一部・浦添間切・北谷間

切・のちの西原間切の一部・のちの宜野湾間切・読谷間切）
巻十六　勝連具志川おもろ（勝連間切・平安座島・伊計島・宮城島・具志川間切）
巻十七　恩納より上のおもろ（金武間切・のちの恩納間切・名護間切・羽地間切・国頭間切・のちの本部間切・今帰仁間切・伊是名島・伊平屋島・伊江島）
巻十八　しま中おもろ（大里間切・玉城間切）
巻十九　ちゑねんさしきはなぐすくおもろ（佐敷間切・知念間切・久高島・具志頭間切）
巻二十　くめすおもろ（摩文仁間切・喜屋武間切・真壁間切・高嶺間切・兼城間切・豊見城間切・小禄間切）
巻廿一　くめの二まぎりのおもろ（久米島）

さて、地方オモロの各巻は（　）内に示した順序で地域ごとにおおかたまとまっており、首里オモロの巻五と七、久米島オモロの巻十一と廿一を除いては、さらにその地域内でも整然とした分類がみられる。地方オモロの全一一巻の地域区分に基づいて作成した図が、「『おもろさうし』にみる地域区分の図」である（次頁参照）。

地域区分のあり方は、見方によって沖縄本島が東西（横）の方向に二本の区切りで大きく三区分される（北山・中山・南山か）。白部分は首里近辺の四間切（真和志間切・西原間切・南風原間切・中城間切）の地域のオモロ巻は特に含まれていない。隣接する各間切（首里を含む）

『おもろさうし』にみる地域区分



―地方おもろ（全11巻）に基づいて作成―

のであろうか。あるいは失せてしまったのであろうか、不明である。

次に首里とその近辺の四間切を核にして、上下に隣接する地域はおおまか南北（縦）の方向に分断した区分でまとまっている。つまり、上方の中頭地域のオモロは、東部が巻十六、中央部が巻二一、西部が巻十五に集まる。下方の島尻地域は、東部が巻一九、中央部が巻十八と十九の一部、西部が巻二十に収まる。そして、国頭地域のオモロは巻十七にまとまる。全体の中核といえる首里地域は巻五と七、離島の久米島は巻十一と廿一である。

『おもろさうし』は各地を網羅して収集したと思われる地方オモロの採録によって、沖縄本島全域をおおい、周辺離島に及ぶオモロ文化圏のあったことがわかる。オモロという琉球王国の神歌言語が、首都である首里と地方を結束する共通した文化基礎を形成するとともに、各地の豊かな伝承を掬い上げ、各地の記憶を蘇らせたのではなかったか。おびただしい数の地方讃歌のオモロ群には、第二尚氏以前に各地において権力を有した領主的人物たちが仰がれて登場している。各地の豊かさこそは統一王権を確立しえた王国の国土の豊饒を語り、誇りとなったであろう。

ところで、地方オモロには奄美や宮古や八重山の巻が立てられていない。が、奄美オモロは船旅オモロの巻である巻十と巻十三に三〇首余が収められており、他巻を含めると全体では四〇首余が取り出せる。地方オモロに奄美を立てなかったのは『おもろさうし』の編纂時が薩摩入り以後であったことを考慮したものであろう。他方、宮古や八重山の先島諸島は一〇首ほどのオモロに出ているが、これらは神女生玉口　巻一・六・七　上久米島　巻十一・廿　仁盛在口　巻廿一・廿一

島とのかかわりで謡われており、あたかも王国の勢力圏を誇示するごとくである。

以下、地方オモロ巻と船旅オモロ巻から東西南北の各地のオモロ例をとりあげる。

五　地方オモロ巻から

（一）沖縄本島南部のオモロ例―石原グスク

まずは、沖縄本島南部のイシャラグスク（現石原城跡）のオモロである。

第二十巻　こめすおもろの御さうし

［本文］

二番うらおそいふし

一　いしやら　たうぐすく
　　ゆかる　たうぐすく
　　かみてだの
　　まぶりゆわる　ぐすく

又　いしやら　よのぬしの

［訳文］

浦襲い節

一　石原平坦グスク
　　良い平坦グスク
　　神太陽の
　　守り給うグスク　［以下の2行は各節で繰り返す］

又　石原世の主の

げらへたる 御ぐすく　　築いた御グスク
又 いくさ よせるまじ　　又 軍を寄せるまい
かたき よせるまじ　　敵を寄せるまい

イシャラグスクは、糸満市伊原の石原にあるグスク。イハラグスクともいい、方言ではイサラグシクという。オモロではイシヤラタウグスク（イシヤラの平坦な地のグスク）とある。イシヤラの平坦な地のグスク・素晴らしい平坦な地のグスクは、イシヤラ世の主が築いた御グスクである、イクサ（軍）・カタキ（敵）を寄せないだろう、神太陽の守りたまうグスクだ、とグスク讃歌である。石原のグスクにはイシヤラ世ノ主と呼ばれるグスクの主がいたことがわかる。

同巻のオモロにみると、近くの米須にはクメス世の主、喜屋武にはフクジ世の主、マカビの世の主などの世の主たち、あるいは大里のテダ（桜色の太陽）、ヤマグスクのイヂヘキ清ラ按司、タタミキヨなどと呼ばれる領主たちがいた。次に示す「bオモロの英雄」は、オモロにみえる王や各地の領主たちの呼称を例示したものである。

b　オモロの英雄

〈王〉

[redacted]

テダガ末按司襲イ（世襲）[redacted]

テダコ（太陽子）按司襲イ 世ノ主など

〈各地の領主〉

[世の主] 石原 米須 真壁 越来 北谷 永良部など
[テダ（太陽）] 大里 勝連 今帰仁 玉城 糸数など
[大や（大親）] 阿波根 親屋富祖 城間 与那嶺など
[按司] 池原 伊江 佐敷 久米 按司ノ又ノ按司など
[その他] ソントノ（舜天） エゾノイクサモイ（英祖） 謝名モイ（察度）
アマワリ（阿麻和利） 宇座ノタチヨモイ（泰期）など

「王」の呼称のうち、オギヤカモイ・テニツギ・テダガ末按司襲イ・首里天ギヤ末按司襲イなどは各王の神号であり、テダコは首里王のみに許された呼称である。〈各地の領主〉には、越来世の主、北谷の世の主、永良部世の主など世の主、カサス若テダ、タナバル（棚原）のテダ、宜野湾のテダ、キタタン（北谷）のテダ、勝連のテダ、ミヤキゼン（今帰仁）のテダ、玉城のイヂヘキ清ラテダ、糸数のテダ、玻名城のテダなど、阿波根の大親、親屋富祖の大親、城間の大親、与那嶺の大親など大親、イケバル（池原）の按司、伊江の按司、佐敷イヂヱキ按司など按司、その他にもエゾ（伊祖）のイクサモイ（英祖王）、オザ（宇座）のタチヨモイ（泰期）など王のことと考えられている人々、

勝連の阿麻和利や読谷の泰期などもいる。

オモロが隆盛した尚真・尚清王朝に、北は奄美の島々から南は八重山諸島まで琉球王国の統治範囲として安定した時期となっていた。尚真王の政策の一には、各地に割拠した按司たちの首里移住を達成したことがあげられている。地方オモロに各地のグスクやその按司たちにかかわるオモロが収集されていることは、こうした政策と無縁ではなかったと思われる。

各地の按司を呼び寄せ、その本拠となった土地の由来や按司讃歌のオモロを集めたことによって、王国の配下にある由緒ある各地は、広く端から端まで王国の豊かな領域内として認識されたものであろう。

(二) 沖縄本島東方のオモロ例—伊計グスク

次に沖縄本島の東海岸、勝連半島に連なるかつての離れ島のオモロをとりあげる。

第十六巻　首里天ぎやすへあんじおそいかなし勝連具志川おもろの御さうし

［本文］　［訳文］

二四番　うらおそいふし　浦襲い節

いけぐすく　おやのろ　伊計グスクの親ノロ

あやこはし　かけわちへ　**綾子橋を　掛け給いて**　【以下の3行は次節で繰返す】

しまかねて　島を統一して

おぎやかもいに　みおやせ　オギヤカモイに　奉れ

又　まちらすの　おやのろ　又　マチラス（神女名）の親ノロ

イケグスクは、方言ではイチ、イチハナリとも呼ぶ伊計島のグスク。親ノロは立派なノロの意でここは伊計島の神女の敬称。

アヤコハシは美しい橋の意で、立派な橋を掛けることによって島を統一し、首里王であるオギヤカモイ（尚真王）に奉れ、という。オモロでは島々を往来する船が橋の働きをなすことが謡われる。船に乗った人々や神女の往来は離れ島を首里へと結びつけたのである。実際の橋ではないが、島を往来する船や神女間の心の結びつきが橋の働きととらえられた。伊計島のマチラスという名の親ノロ（神女）は島人の王への忠誠の心を奉る役割を果たすのである。

ノロは八、九世紀以後、各地の按司のオナリ神を呼び、中央集権制が確立した尚真王時代には公儀ノロとなり、首里王府から辞令を受け、土地を与えられ、各村の神祭りを管轄したという。オモロにはノロ・君などと呼ばれる神女群像がみえ、神女たちの神歌としての性格をもつ。次の「cオモロの神女」は「オモロ」にみえる神女たちの呼称を例示したものである。

c　オモロの神女

〈君〉

聞得大君（巻一・三）
首里大君　宣ン君　君カナシ　君ノ頂（以上巻六）
鬼ノ君　照ル君　世寄セ君　君良シ　君襲イ君　君南風など

〈親ノロ・ノロ〉

首里杜親ノロ　真壁杜親ノロ　西杜ノ親ノロ（以上は上級神女）
伊是名親ノロ　浦襲イノ親ノロ　カイフタ（与論島）ノ親ノロ　辺戸ノ親ノロ
今帰仁ノ親ノロ　伊平屋ノ親ノロなど
赤木名ノロ　天久ノロ　宜野湾ノロ　馬天ノロ　兼城ノロなど

〈その他〉

煽りヤヘ　差笠（以上巻四）　百年踏ミ揚ガリ（巻六）
鈴鳴リ　望月　イロメキ　ソヨメキ　コイシノ　アケシノ　コシラへなど

オモロにはイヂヘナ親ノロ・ウラオソイノ親ノロ・カイフタノ親ノロ・ゴエクモリ親ノロ・タイラモリ親ノロ・ヘドノ親ノロ・ミヤキゼンノ親ノロ・エヒヤノ親ノロなど「親ノロ」と呼ばれるもの[illegible]

一方、神女をさす語に「君」があり、首里大君、宣ン君、鬼ノ君、照ル君、世寄セ君、君ガナシ、君ノツンジ、君良シ、君襲イ君、君南風などがある。

さらには「ノロ」や「君」は含まず、煽リヤヘ、差笠、百度踏ミ揚ガリ、鈴鳴リ、望月、イロメキ、オワモリ、コイシノ、アケシノ、ソヨメキ、コシラへ、等多彩な呼称もみえる。

こうしたさまざまな呼称で登場する神女たちの組織は、尚真王代に確立されたという。すなわち、王のオナリ神的存在である妹のオトチトノモイカネを最高の神職である聞得大君に立て、その下にシヨリモリ親ノロ・マカビモリ親ノロ・ニシモリノ親ノロの三人の上級神女がおり、その配下に琉球全域の神女は組織化されていたといわれる。『おもろさうし』はこうした神女たちの神歌としても盛んに謡われた。

『おもろさうし』の巻一・三・四・六は表題に神女名を示した神女オモロの巻である。他に巻七の前半・巻九・巻十なども神女オモロとみられ、全体ではおよそ二三％を占める。

（三）沖縄本島西方のオモロ例―具志川グスク

さて、西方の例として、君南風という神女のいた久米島のオモロをとりあげる。

第十一巻首里ゑとのおもろ御さうし

［本文］

二七番　あおりやへがふし

（＝第廿一巻の一一四番）

一　ぐしかわの
　まだまうちは　げらへて
　　よくげらへて
　　まさりゆわる　せだかこ

又　かなふくの
　まだまうちは　げらへて

又　たうのふね
　せにこがね　もちよせるぐすく
　　よくげらへて

又　やまとふね
　せにこがね　もちよせるぐすく

［訳文］

煽りやへが節

一　具志川の
　真玉内（具志川城）は　造営して
　　良く築いて
　　勝り給う　精高いお方

［以下の2行は各節で繰返す］

又　金福の
　真玉内（具志川城）は　造営して

又　唐の船
　せに（餞酒）黄金を　もち寄せる城
　　良く造営して

又　大和船
　せに（餞酒）黄金を　持ち寄せる城

久米島具志川グスクは具志川の真玉内・金福の真玉内と呼ばれ、立派に築きあげたそのグスクには唐や大和の船が酒や黄金などを持ち寄せて、勝りたよう霊威高いお方、という讃歌。中国や日本との交易を営み、船々が遠来の酒や富を満載してもたらし、具志川グスクの繁栄していた時代がうかがえる。

『おもろさうし』にはタウ（中国）・ナバン（東南アジア諸国）・カワラ（カハラ、ジャワのこと）、大和・ヤシロ（山城）、キヤ（京）・鎌倉、ツクシ（筑紫）などがうたわれており、国外や島外の地域と親しく交流・交易のあったことがわかる。オモロをみると首里だけでなく、久米島や佐敷・知念・読谷・勝連など各地とも往来があった。琉球の大交易時代がうかがえる。

具志川グスクは、真ダフツノ按司によって築城、その子マカネコヘ按司はイシキナワ按司の次男マニヨク樽按司に滅ぼされ、そのマニヨク樽按司もまた首里に征伐されたという。久米島にはこの具志川城跡のほかに、伊敷索城跡、宇江城城跡、登武那覇城跡がある。伊敷索には伊敷索按司、宇江城には久米中城按司（伊敷索按司の長男）、登武那覇にはガサスチャラ按司（伊敷索按司の三男・カサス若テダ）の領主たちの伝承がある。

しかし、これらのグスクの主たちもまたすべて滅んでしまった。地方オモロに讃美的にうたわれている按司や世の主やテダなど、各地で繁栄していた支配者たちのグスクは、みごとなまでに人影失せてしまっている。

おそらくは『おもろさうし』を収集した時代にはすでに滅んでいた地であり、由緒あるその豊かな地の英雄たちは土地を離れていただろう。あるいはその地に残ったとしても首里王府の支配下にあって、直轄地として貢ぎ物を納める者となったにちがいない。

六　船旅オモロ巻の奄美諸島と神女オモロ巻の順風祈願

(一)　船旅オモロ巻の奄美諸島

はるか北の奄美諸島もオモロ圏である。その一例を挙げよう。

第十三巻　船ゑとのおもろ御さうし

［本文］

一二三番　うちいではさはしきうがふし　打ち出はさばしきうが節
（＝第十巻の四四番）

一　きこゑおしかさ　　一　聞こえ押笠
　とよむおしかさ　　　　鳴響む押笠
　やうら　おちへ　つかい　　そっと押して使い　［この1行は各節で繰返す］
又　ききやのうきしま　　又　喜界の浮き島
　ききやのもいしま　　　喜界の萌え島
又　うきしまにかから　　又　浮き島から

びるかさりきやち　　**辺留笠利へ**

又　びるかさりから　　又　辺留笠利から
　中せ（とう）ちきやち　　中瀬戸内へ
又　なかせ（とう）ちきやら　　又　中瀬戸内から
　かねのしまかち　　金の島（徳之島の美称）へ
又　かねのしまから　　又　金の島から
　せりよさにかち　　せりよさ（沖永良部の古名）へ
又　せりゆさにから　　又　せりよさから
　かゑふたにかち　　かえふた（与論島の古名）へ
又　かゑふたにから　　又　かえふたから
　あすもりにかち　　安須杜（辺戸）へ
又　あすもりにから　　又　安須杜から
　かなひやぶにかち　　金比屋武（今帰仁城内拝所）へ
又　かなひやぶにから　　又　金比屋武から
　なはどまりかち　　那覇泊（那覇港）へ

押笠神女に順風を祈って、航海途上の喜界島から那覇港に至る迄の島名や地名をていねいに、リ

ズミカルにうたいあげることで、旅の安全を祈願したオモロである。

重複する第十巻では地名がもっと多く挙げられており、喜界島から辺留笠利、中瀬戸内、徳之島、沖永良部島、与論島、安須杜、赤丸（辺土名）・サチガ杜（古宇利島の杜）・サキヨダ（残波岬）の親泊は那覇泊とあり、那覇泊からシヨリ杜（首里城）で終わる（傍線は重複オモロにみえる部分）。島々や航海の目標の杜名・岬名などを一つ一つうたいあげることによって、その島や岬にます神の加護を受けようとしている。神や神女に呼びかけて、船の航行を見守ってもらい、安全を祈願したオモロは航海オモロや神女オモロに数多い。

巻十や巻十三の船旅オモロも含めて、オモロの旅歌の特徴の一には、航海をわがこととして船人の立場で神や神女に祈願した内容となっていることが挙げられよう。

（二）神女オモロ巻の順風祈願

最後にもう一例、神女オモロの巻から、帆船の航海にふさわしい風を願ったきわめて呪的な一首である。全体は三節からなるオモロで、第二・三節の歌詞には第一節を参照して不足部分を補って、［復元本文］のみを示し、［訳文］は省略した。

第十二巻　いろいろのあすびおもろ御さうし

［復元本文］

七七番

一　やにや　はれ　ゑおい
ちよろめへ　ゑい
やうら　やうら　やうらへ　ゑおい
やうら　やうら　やうらあ　ゑおい
やうら　やうら　やうら　ゑおい
やうら　やうら　やうら
あゑい　ゑおい

又　やにや　はれ　ゑおい
ちよろめへ　ゑい
やうら　やうら　やうら　ゑおい
ヤウラ　ヤウラ　ヤウラア　エオイ
ヤウラ　やうら　やうら　ゑおい
やうら　やうら　やうら
あゑい　ゑおい

又　やにや　はれ　ゑおい

ちよろめい ゑい
やうらや やうら やうら ゑおい
ヤウラ ヤウラ ヤウラア エオイ
やうら やうら やうら ゑおい
やうら やうら やうら
あゑい ゑおい

神女オモロで、帆船の航海にふさわしいおだやかな風をひたすら願ったオモロである。軟らかな、やさしく吹く風は帆を孕ませて、船は海上をなめらかに走らせよ、と祈願するのである。強風は危険であり、無風もまた航海にふさわしくない。神女たちはヤウラ吹く風を乞うて、好ましい風（ヤウラ…そっと、おだやかに吹く風）を幾度も幾度も言葉にして繰り返しうたった。

オモロの旅歌は、送る人も送られる人もひたすら安全な航海や無事なる帰りを願って、理想とすることがらをうたいあげた。

万葉集には遣唐使や遣新羅使関係の外国への船旅の歌があるが、万葉歌とオモロとでは、航海の平安と無事な帰還を祈った表現態度に大きな違いが指摘できる。万葉歌だと旅立つ人に早帰リコネ・早帰リマセ・早渡リキテなど待つ側から「帰る」ことがひたすらうたわれる。或いは海の神に祈るので「船は早けむ」とうたう。

対して、オモロは待つ側と旅立つ側の隔たりはなく、旅立ち全我が一体となって、船人の立場に立って神々や神女たちに向けて祈られた、祈願に満ちた祝歌である。

七　『おもろさうし』の再編纂の謎

ところで、今日、複製本を手にすることのできる尚家本『おもろさうし』は、国の重要文化財に指定されている。最古の写本で、後の世の書き改め本である。原本は一七〇九年一一月の首里城の火災で消失し、翌年に尚家本と安仁屋本の二部の書き改め本ができる。尚家本は現在沖縄県立博物館に所蔵されているが、おもろ主取の保管した安仁屋本の所在は今次大戦で不明となっている。

この書き改め本はもとの通りに書き改められたとはいうが、再編纂であったことが目録や家譜などの記述からわかる。

先に成立した第一巻には遅れて成ってくる第二巻以下を含む全体の目録がある。また最後の巻には後書きがあり、作業に関わったスタッフがわかるが、同じ人々が沖縄最古の辞書である『混効験集』の編纂者と重なっている。急ぎの書き改めは『混効験集』の編纂スタッフを中心になされた。スタッフの家譜によると国中に文書を出して問い合わせ、旧本のごとく二二冊とした、とある。

同じく家譜資料によると再編本の完成は一月早かったことがわかっている。次に示したdの年表は『おもろさうし』の書き改め本（再編纂本）の成立前後の注目すべき関連記事である。

d　『おもろさうし』の再編纂時

一七〇九年　七月二三日　尚貞王逝去　＊この年台風襲来七次・
一七〇九年　一一月一八日　尚益王即位　大飢饉死者三一九九名
一七〇九年　一一月二〇日　首里城炎上
一七一〇年　六月　三日　『おもろさうし』成就（国場朝睦の家譜）
一七一〇年　七月　二日　慶賀・謝恩の使節団一六八名出発
一七一〇年　七月　三日　『おもろさうし』認証（成立）
一七一一年　七月二二日　使節団帰国
一七一一年　三月二四日　『混効験集』認証（成立）

当時、台風の襲来七次、大飢饉による三一九九名の死者の記録があり、尚貞王の逝去と尚益王の即位という新旧の王の交代、さらには慶賀・謝恩の大使節団の翌年の江戸上りが決定するが、首里城が火災に遭い、炎上した正殿・北殿・南殿などの再建問題もかかえることになる。

天変地異の不穏続きのこのような情勢の中で、御城に御格護にすべき『おもろさうし』の書き改め事業は火急に運ばれているのである。『おもろさうし』は、当時の琉球にとってぜひとも蘇らせねばならない王国第一の貴重本だったといえよう。現在に残る『おもろさうし』はこの書き改め事業の成果である。

[redacted]

中の使者に組踊創始者朝薫の姿が見え（ホーレー文庫蔵『琉球人登城之行列』）、江戸で披露された琉歌の記録も残る（荻生徂徠『琉球聘使記』）。この数年後に組踊が生まれ、琉歌は琉球歌として盛んになっていく。かつて琉歌や組踊りは交流・親睦のために日本や中国の人々の前でも披露され、現在も沖縄の特色ある文学・芸能として健在である。だが、『おもろさうし』は王府の手で消失からよみがえったものの、王国の栄華時代を証する神歌は、その生きる場をほとんど失って、多くの謎を秘めたまま、人々の訪れを待っている。

琉球文学の本格的な研究は田島利三郎によって発表された（一九〇〇年「琉球語研究資料」）。研究を継いだ伊波普猷は『おもろさうし』を「琉球の『万葉集』ともいうべきもの」と説明した（一九二四年『おもろさうし選釈』など）。

しかしながらオモロには人間の死にかかわる挽歌はない。恋の歌はわずかである。

古琉球のオモロ人たちがあやなした霊力ある言葉は、王や各地のグスクや英雄を讃え、神や神女に長久や平安や戦勝などを祈り、いわば人間の生に深くかかわる歌集である。

ここではふれることができなかったが、オモロの名人と呼ばれる男性歌人たちの活躍もあり、オモロは群雄割拠の忘れ去られた時代から統一王国までの躍動が辿れる世界である。

付記

なお、本稿の各論は、とくに以下の拙稿で詳述したものである。

「『おもろさうし』の書き改めと『混効験集』の編纂」（『南島史学』第一一号所収　昭和五三年刊）

「おもろと万葉歌」（『沖縄国際大学文学部紀要国文学篇』第一五巻第一号　昭和六一年刊）

「『おもろさうし』神女考」（『沖縄文化研究』第一四号所収　昭和六三年刊）

「『おもろさうし』歌人考」（『沖縄国際大学文学部紀要国文学篇』第一七巻第一号　昭和六三年刊）

「『おもろさうし』の謎とその魅力」（『日本歌謡研究』第三一号　平成三年刊）

「『おもろさうし』太陽考」（『専修総合科学研究』第二号　平成六年一〇月）

「『おもろさうし』にみえる地域区分について」（『沖縄文化研究』第二二号所収　平成八年刊）

沖縄民俗音楽への誘い

―神歌からオキナワン・ポップスまで―

比嘉　悦子

沖縄国際大学公開講座7

南島文化への誘い

発　行――一九九八年三月三十一日
編　集――沖縄国際大学公開講座委員会
発行者――湧上敦夫
発行所――沖縄国際大学公開講座委員会
〒九〇一―二七〇一
沖縄県宜野湾市宜野湾二丁目六番一号
電話　〇九八―八九二―一一一一（代表）
印刷所――株式会社近代美術
発売元――那覇出版社
〒九〇一―一一一一
沖縄県南風原町字兼城五一五―五
電話　〇九八―八八八―二一五一

ISBN4-89095-112-1　C0000　¥1500E

乱丁・落丁はお取り替えいたします。